

# 文献資料紹介

〈第36回〉

# 屋久島民謡集

山本秀雄

○一月七日の福祭文

祝うて申す (木戸祝)

恒例の門松 いつもより今年は

木戸の松が栄えた 栄えたも道理よ

東の方の枝には飛魚が下がりて

西の方の枝にはうぐいすがとまつて

ひぐいすがめえに生えたる稻は

一株刈れば千石 二株刈れば二千石

そなたの宿を見わたしてみれば

米の俵千石 もみの俵一千石

祝うて申す

祝うて申す (船祝)

恒例のお船に白金柱おしたて

黄金の滑車をくるませて

本帆にや綾錦 手綱荷縄ととのえて

宝一隻積みこんで

宝が島に打の向けて思の想にむかひよどり

祝うて申す

祝うて申す (井戸祝)

恒例のお庭に井川を堀りて

水はくめども泉の滝が湧き候

○子守唄

みたけすすだけ野は石榴花で

雪にせかれてたちかねる

みたけ白雪や朝日とじけぬ

おじが島田は又寝てとけぬ

屋久の御岳の七本杉よ

様は三杉でわしや四杉

屋久の御岳の石榴花よ

年中つぼんで一度咲す

○四ツ竹踊り (押しかけ節)

押しかけ節は永田がむすよ セノ

叶も向江も新町も

押しかけノイノイ船乗りや船頭船頭

鶴瀬れば歌でやる

押しかけノイノイ船乗りや船頭船頭

永田嫁じよは枯木の枝よ セノ

白金びんに黄金のひしゃく  
汲んでも汲んでもつきはせぬ

祝うて申す

恒例の門松 いつもより今年は

木戸の松が栄えた 栄えたも道理よ

東の方の枝には飛魚が下がりて

西の方の枝にはうぐいすがとまつて

ひぐいすがめえに生えたる稻は

一株刈れば千石 二株刈れば二千石

そなたの宿を見わたしてみれば

米の俵千石 もみの俵一千石

祝うて申す

祝うて申す (船祝)

恒例のお船に白金柱おしたて

黄金の滑車をくるませて

本帆にや綾錦 手綱荷縄ととのえて

宝一隻積みこんで

宝が島に打の向けて思の想にむかひよどり

祝うて申す

祝うて申す (井戸祝)

恒例のお庭に井川を堀りて

水はくめども泉の滝が湧き候

登の姫るとおそれしや  
押しかけノイノイ船乗りや船頭船頭

祝うて申す

恒例の門松 いつもより今年は

木戸の松が栄えた 栄えたも道理よ

東の方の枝には飛魚が下がりて

西の方の枝にはうぐいすがとまつて

ひぐいすがめえに生えたる稻は

一株刈れば千石 二株刈れば二千石

そなたの宿を見わたしてみれば

米の俵千石 もみの俵一千石

祝うて申す

祝うて申す (船祝)

恒例のお船に白金柱おしたて

黄金の滑車をくるませて

本帆にや綾錦 手綱荷縄ととのえて

宝一隻積みこんで

宝が島に打の向けて思の想にむかひよどり

祝うて申す

祝うて申す (井戸祝)

恒例のお庭に井川を堀りて

水はくめども泉の滝が湧き候

○一月七日の福祭文

祝うて申す (木戸祝)

恒例の門松 いつもより今年は

木戸の松が栄えた 栄えたも道理よ

東の方の枝には飛魚が下がりて

西の方の枝にはうぐいすがとまつて

ひぐいすがめえに生えたる稻は

一株刈れば千石 二株刈れば二千石

そなたの宿を見わたしてみれば

米の俵千石 もみの俵一千石

祝うて申す

祝うて申す (船祝)

恒例のお船に白金柱おしたて

黄金の滑車をくるませて

本帆にや綾錦 手綱荷縄ととのえて

宝一隻積みこんで

宝が島に打の向けて思の想にむかひよどり

祝うて申す

祝うて申す (井戸祝)

恒例のお庭に井川を堀りて

水はくめども泉の滝が湧き候

登の姫るとおそれしや  
押しかけノイノイ船乗りや船頭船頭

祝うて申す

恒例の門松 いつもより今年は

木戸の松が栄えた 栄えたも道理よ

東の方の枝には飛魚が下がりて

西の方の枝にはうぐいすがとまつて

ひぐいすがめえに生えたる稻は

一株刈れば千石 二株刈れば二千石

そなたの宿を見わたしてみれば

米の俵千石 もみの俵一千石

祝うて申す

祝うて申す (船祝)

恒例のお船に白金柱おしたて

黄金の滑車をくるませて

本帆にや綾錦 手綱荷縄ととのえて

宝一隻積みこんで

宝が島に打の向けて思の想にむかひよどり

祝うて申す

祝うて申す (井戸祝)

恒例のお庭に井川を堀りて

水はくめども泉の滝が湧き候

# 屋久島民謡集について

鹿児島市にお住まいの黒木林さんという方が、昭和二十五年頃採集された「屋久島民謡集」というを拝見する機会があり、早速、本紙掲載をお願いしましたところ心よくご諒承をいただいので、ご紹介する次第である。先ずは黒木さんに感謝とお礼を申し上げます。

屋久島は古来、歌舞演劇が盛んに行われた島であつたと云うが、最近生活様式のさま変わり、また、音楽の都市化と相俟つて、伝承の場であつた村祭り等の年中行事も薄れ、伝統芸能は消滅の危機に至つてゐる。私も屋久島の民謡をたずねて、折目式目に歌詞等調べて来たが、近年は最も一般的な山祭りの木挽唄、大漁祭りの舟唄、正月の祝慶歌、子守唄までも唄われず聞取り調査も出来ない始末で困つてゐる。

寛政年間の本に「屋久島記」というがあるが、島の淨瑠璃狂言にもふれて、二才衆の演じた「御所桜堀川夜討」の役どころを面白く評しており、興業も三日間であつたこと、また芝居小屋ばかりか囃子音頭につきものの鳴物、三味線も手づくりであつたようだ。旧家の床の間に箱三味線を見ることがある。殊に芝居狂言の台本は昭和五十年頃まではよく見掛けた、私のメモに江戸末期の文久二年本が宮之浦に、大正三年台本を楠川にと記しているが、この稿を書くに当つて調べたがいずれも所在は不明であつた。

末筆になつたがこの民謡集は、黒木さんが戦後の昭和二十五年～二十七年の二ヵ年を、熊毛市庁、屋久島連絡事務所に勤務された折、屋久島によく唄われていたものを専ら裏席で採集したものの由である。方言でも同様で、紹介はするものの字足らず、字余りをどう正調に乗せるかわからないまま、原本に従つて再録したが、歌章の不備も土地柄とご理解頂ければ幸甚である。

なお字句に明らかな誤字のみ一部改めているを付記しておきます。今は消滅に近い貴重な資料、民謡の数々を掲載させて頂き重ねてお礼を申します。

船を出しませ 櫃取りおやじ 麻子  
おんぼ巻きあげ滑車口しyanと 風もよいよい穴瀬の風よ  
穴瀬好むは播磨の灘よ 穴瀬

播磨灘をば走り抜けました 麻子  
ここは何処よと船頭衆に問えば ここは一の谷敦盛様の大ださんした  
熊谷殿よ おはか所で皆手を合わす  
ここは橋ぬき兵庫の前

兵庫の前をば走り抜けました ここはどこよと火夫衆に問えば  
ここは大阪川口筋よ 伝馬おろして  
本帆おろして錨をつけた  
やお帆おろしててんまをおろす  
そこで陸にと端綱を取りて  
そこで甚九郎は陸にと上がる

松坂越えて坂越えて 向うの小山に鳴く鹿は  
寒さに鳴くかよ妻よぶか  
塞さに鳴かぬ妻よばぬ  
明日はお山に狩がある  
まぶしまぶしにや狩人が  
赤白黒が追い廻る

この身一人は逃れもするが  
あとに残りしこの子が可愛い  
どうして逃がりようか  
助けてたもれよ山の神

## ○甚句

一 正月はゞこも門に門松 木戸に松  
(囃子) 山伏やホラ吹く 鯨は汐吹く

知らん者は黙つとれ黙つとれ  
二月は初午旗が立つ

三月節句にやひなが立つ  
四月八日にや祝迦が立つ

五月五日にや幟立つ  
六月祇園で夜灯籠が立つ

## ○扇子踊り

## ○押船競争

一 川の流れもよき様に  
右大臣左大臣ここに止まり

流れる水の音 船先ここに止まり  
カイシの所に候なり

一 沖には鳥まき中海は出魚  
へのヌゼン瀬には雑魚ばかり

一 船は見えたが様じよは見えぬ

十二月には借金取りが門に立つ  
立たれて私はノホホイエー腹が立つ  
デスコイデスコイ

様はひのまの帆の隣に

ヤツレセイ 田イヤナ一

今年は満作 実沃な年よ

空のセタ お愛しゆひづざる

(離子) サーソレガ 先を干ソード  
年に一度も会いかねる

踊りの衆よ 先廻り踊りが所望だが  
合点か オーサ合点だ ヤリヤサンセ

今年は都から大黒様の弟のエビス様が  
お渡りだよ フームとかな

アーマンジドジだ

お渡りなされて

栗瀬 泊郷の大水勢

ソラソードヤレバ獲るうといひ  
獲るうよ

獲れば廿百万八千と獲り上げよう

メドタイナ オーイヤンジロード  
飛魚どれどれ百万五千

皆の船さえ それがよい

飛魚どれどれ一万五千

様の船さえ獲ればよい。

### ○大漁節

み崎觀音崎

鳥が巣くなれば  
あれは飛魚が見ておじやれ

永田まわり田にしらふきあげた  
これも飛魚ぢやと見ておじやれ

### ○御田んぼさんさ節

あとに名残りの あいの池

ヤツレセイ 田イヤナ一

神のおかげで 思ひたかのた

年中思つゝた 今かのた

宿がよければ 名はたたぬ

トトモも旅ぢやよ 又行く先も

同じお隣で思つこたかのた

お渡りだよ フームとかな

アーマンジドジだ

お渡りなされて

栗瀬 泊郷の大水勢

ソラソードヤレバ獲るうといひ  
獲るうよ

獲れば廿百万八千と獲り上げよう

メドタイナ オーイヤンジロード  
飛魚どれどれ百万五千

皆の船さえ それがよい

飛魚どれどれ一万五千

様の船さえ獲ればよい。

### ○祝儀歌

屋久の御岳をおろかに思つな

金の藏より なおたから

願のおかげで思う」とかのた

末は鶴龜 五葉の松

親は田まで子は九十九まで

共に田穀のはえるまで

親の御恩じ汐に入る川は

行けば行くほど 深うじやる

田出たいものはお野の種子よ

葦は永く葉は広く根には繁昌の子がさす

田出たいものはおほばの種子よ

花咲かせ裏にならせみかじ合せてナイヨド

永田田もよか水までよいが

浜の小松の一の枝

ナンドロジドロード

芝かきよせト蝶をつぐむ

十一の卵を産み揃え

### ○よこいと節

屋久の島中の男衆は

山師で嘗めりす処なり ナンドロジドロード

十日はわが家に 二十日は三日

最早御山に成り向けば

五日六日は便つなし

七日に当たるその日には

杉の木枝を取り出す

中山だしに来て見れば

見ればわが氣もジンとなる

空の星かよ 田で見たばかり

ウズラ鳥かよ あわこいし

鳶鳥が鳶が

今年はじめて都に上がる

ナンドロジドロード

都の街は広けれど

一夜のことなら宿といひ

木の根のウロに宿からつて

枝を枕に葉を頭歛

お用ながめでお経よむ

鳶鳥が鳶が

浜の小松の一の枝

ナンドロジドロード

川の渓瀬の滝水さえも

口説唱えれば留まるほど

眼つやうやうりぬお経でじやれ

十一 繕じ田をあけて  
親もるとともに発つ時は  
黄金の盃取りいだし  
また白金の盃を

呑めば大黒 喰えれば恵比寿  
受けて喜ぶ福の神

シユンガオ

○おつばんだ

遠く離れておる身のつりさよ  
夢でお顔を見るばかり

名残りぢや名残りぢや今夜島の名残りわや  
明日は出船の波枕

思つて来たかよ思わず来たか  
何が思わず来るものか

泣くななげくな浮世は車

命や長がろ めぐり合ひ

艤にや大黒 表にや恵比寿ヨー

中にや十二の船玉様よナ一

船玉様よ繁ぐ旅をばさしてたもれな

船も早かれ嵐もよかれな一

先の積荷の荷もよかれな

国のはじめは京都が元よ一

村のはじめは吉田が元よ一

唄のはじめは口説が元よ一

口説唱えれば空飛ぶ鳥も

羽根をすばめて留まるほど

川の渓瀬の滝水さえも

口説唱えれば留まるほど

眼つやうやうりぬお経でじやれ

○如竹踊り

一人忍ぶウーツーハぢゅうに子が添つよ  
雨に霞工一エーノー雪に柴垣

えびじょうかけがねわか女房  
いんの村ホーエイエヘン御精進

月はえひもの

山雀ノーサーテ籠の内でも恨みもの  
ソーラ籠籠でエーノーサテ工もむいたい

七里お浜の砂の数々思えども  
縁が薄いかノーサーテ逢いもせぬ

佐渡と越後は筋向い

橋を掛けようや舟橋を  
いづれ沖になあ

サーエイトコサイサイエイアーカヤ  
哀れ身が舟なれば

思つかこ様わがうち乗せて  
嵐やなくとも我が宿に一

いつれ沖になあ

信濃直政の人よな人のナカアナカア一  
思い増すまた夜は明ける冬の朝

道しめりけるナカーナカーナカナカ  
我れはや一備前のや一鑄び刀

思い合わせてや研(研)ほしやとぎほしや  
比翼連理と契りし仲をます肌や

割れじ捨てられんあたらや君さま  
きんだんさのいに月をき里に住まわせ

今朝の名残りの恨みといめなます肌や  
割れじ捨てられんあたらや船とま

きんだんさのいに月をき里に住まわせ  
あたらや船とま

かんだんさのいに月をき里に住まわせ  
あたらや船とま

ヤソニアヤソニアヤソニア  
ヤソニアヤソニアヤソニア

さーひばに馬につかうしゃれ  
エーキ 日のまん丸

宿のエーセーサーコノエノセヒー  
たても調子が揃つたぞエーアーセー

尚も田出度いなん上下ヤツツ  
田出度のヤンナヤホホマホンヤン港

ヤーサーゼー

初のおいでエーザー ジーゼー  
エイセーエーゼー

葉もしげるよき住吉の松はヤツツ  
祝いのヤソナモノ松はヤレ久し

エーキ 日のまん丸

菊の屋花のヤーヨルオヤナー  
アレ嬉しいことやオシヤツサー

嬉しいことヤイサー

## ○返し船

かれのシの船になだヨシを乗せて  
沖のムナカヤ針がキヨラサーヤンナ

ありやマア見れずやオンヤサー  
山見れずヨイサートーナーカヤ

針が今日なー  
お船魂ハーユーム

かれのものやによるなー  
あれ船頭からヨイサー

船中衆やかれおしのよモノヤナ  
この井の測にヤー

ソント福据えてヤー嬉しいことヨイサー

菊の屋花のヤーヨルオヤナー  
アレ嬉しいことやオシヤツサー

嬉しいことヤイサー

## ○歌

ソーリー段良うじじいましよう

さーひば綱につかうしゃれ

ヤソニアヤソニアヤソニア

メテタノヤソニアワカ枝もヤツツ榮ある

詳細は次号に

